会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和５年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」事業（２）教職員の資質能力向上の推進① 効果的な教育成果の公開方法等に関する支援体制づくりの推進 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第4回授業改善サポーター養成講座開発委員会 |
| 開催日時 | 令和6年1月29日（月）15:00～17:00 |
| 場所 | リファレンス西新宿（ハイブリッド形式） |
| 出席者 | 事業責任者：成底　敏（OL）、岡村　慎一　　　　　　　　計2名委　　　員：猪俣　昇、栗林　直子（OL）、合田　美子（OL）伊藤　宏一郎（OL）、半田　純子（OL）、吉橋　大樹（OL）、遠藤　和彦計7名請負業者　：飯塚　正成　　　　　　　　　　　　　　　　計1名　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合計10名 |
| 議題等 | １）第３回リフレクションの振り返り①実施（運営）側として、合⽥先⽣の意⾒合田の意見：研修3は研修1,2のリフレクションであり、定着を図るという位置づけである：アンケートの棒グラフはARCSモデルを活用した：研修1では研修への注意喚起されたが、研修を通して本研修が自分に関係があると分かったことで、研修が有効だと感じたり、自信につながったのではないかと考察している：研修3は、自信を持って授業コンサルティングを実施してもらえるように声がけをした：研修2よりも、研修3の方が慣れた印象→新しい学習内容ではないが、それぞれの先生が実践を共有し、理解の定着を図れた研修だった：研修3で開発したサポートツールの議論を通して、教員らは学ぶことがあったのではないか伊藤の意見：どのグループも活発にツールを開発したものをチーム共有していた→冬休み期間でディスコードを用いた会議を行ったとの発言があったため、研修の狙い通りに教員が受講してくれた印象：事前学習を通して、分からないことを調べる力は身についたものの、業務との兼ね合いを踏まえると、負荷となった教員もいる→ボリュームを調整する必要がある栗林の意見：長期間に及んだ研修ならではの良さがあったのではないか：研修の内容を現場に落とし込んだり、研修内容を組織に反映させるために行動をした教員がいた：コミュニティを活性化するという目的があったが、ディスコードを用いて年末年始に活発なコミュニケーションをとったことは、教員の学びの成果につながったのではないか：業務が忙しい中事前学習に取り組むことが大変だった教員がいたという印象を受けた→全体的に一生懸命取り組まれていた。次年度にどのようにつなげるか、成果物に繋げる方法を考える猪俣からの質問：アンケートではディスコードを使うかどうかについて、意見が分かれたが、研修中に教員からディスコードについての発言があったか？伊藤の意見：研修中にはツールの是非についての意見はなかった：最初からディスコードだったら対応できたのではないか猪俣からの質問：ムードルとディスコードの機能的な違いはあるのか？合田の意見：ディスコードの方が気軽にコミュニケーションが取れる：しっかり議論をしたい時には、ムードルの方が学習が進む：途中からディスコードを導入したことで、うまく活用できなかった教員がいた。→研修１の対面研修時にディスコードのフォローが出来れば良かった②参加者アンケートに結果について：研修3アンケート結果サマリを参照２）令和５年度の振り返り①成果＝成果物について猪俣の意見：ツールについて考え直す必要、研修のボリューム感について考える必要がある合田の意見：二か月間の講座を通して、授業改善サポーターとして個人として活躍をしつつ組織レベルで働きかけてほしいという狙いがあった→個人としての活躍は見られたが、所属先への働きかけは難しい現状にあるかもしれないとしれないと思った→全専研として、組織に対して働きかける必要がと思った：二か月が丁度良いか？という疑問があるが、3回の研修を通して自信を持ってもらいたいという期待があった：対面での研修が望ましいが制約もある。最初の研修を対面にするか、終わりの研修を対面にするのかについても含め、対面研修とオンライン研修の組み合わせ方を考える必要がある：コミュニケーションツールは、決まり次第最初にアナウンスする：伝えたい事ややってもらいたいことを鑑みて現在の量の事前課題を課しているため、研修を充実するためには事前課題の量を調整するのは難しい→熊本大学が提供している教材を専門学校のケースに落とし込み、学びやすい教材にする必要はあるかもしれない：アクションプランは研修終了後の課題にすることもできるが、アクションプランをやったことを確認することが難しい現状もある猪俣の意見：「講座事後に実施されたリフレクションを取りまとめた情報」を参照し、課題点を述べた（課題点は以下のとおりである）①事前課題の理解とアクセスの課題②研修時期の課題③実践例と具体性の欠如④オンラインツールと設備の課題⑤コミュニケーションと交流の不足⑥オンラインコミュニケーションツールの課題：専門学校に則った事例づくりをする必要がある。来期、実施する岡村の意見：初期の目標設定からブレがないのかを確認する方法がある：研修の目標が3つあったが、学習目標の評価方法が明らかになっていない課題がある：事前学習やゴールの位置づけについてのオリエンテーションが必要だと思った（口頭や文書による案内のみでは分からない）。→オリエンテーションにて目標の明示、事前学習の取り組み方、グループ顔合わせを実施した方がモチベーションが高まると考えた吉橋の意見：ベテランの教員が多い研修ゆえに教員独自のやり方が確立されているものの、モジュールを基に研修を進められたのは良いと考えた：事前学習の理解を深めるために、モジュールの内容を要約したものや、動画教材がある必要があると考えた（コストは要検討）：事前学習についてオリエンテーションなど、丁寧に説明する必要がある：個人的には研修は短いと感じたが、参加した教員が丁度よいと感じていた：２日間の泊り研修にすることで、オリエンテーションの時間をとるのは良いアイデアだと思った：若い教員はディスコードを使うため、今後教員になる人の敷居が下がる。良いツールだと思った：授業評価ツールの開発のときに、時間が後ろに押していた→大枠で見ると、先生は研修の長さについて満足しているが、細かい説明がしきれていないため、研修時間を見直す必要があると考える猪俣の意見：参加者の役職（講師歴）を把握しきれていなかった→参加者の必要条件を明示していなかった可能性がある遠藤の意見：同じ地域、同じ専門学校をグループにすると良いと思った。→アクションプランに系列校の先生と頑張りたいと考える教員がいた。同じ地域の教員の方が、コミュニティとして長続きしやすいと思った。：熊本大学のモジュール学習をオリエンテーション時に提示し、最初からグループでモジュール学習に取り組めるようにすると良いと思った。猪俣の意見：地域的なまとまりを意識しつつも、文科省事業として全国普及をする必要がある。全国普及方法を次年度に考える必要がある。半田の意見：課題で困っている人向けに、サポート期間/ 窓口を作ることで、うまく課題が出来ない人のサポートを実施したり、グループワークでつまづいていることを共有できる時間を作るのは良いのではないか。→サポートを受けることで、教員への支援方法が理解できる。成底の意見：現在は、合田先生の知見・経験に依存した属人的研修になっている。→合田先生ができなくても出来る講座にしなくてはならない。Ex.)インプットの講義のパートは、オンライン動画を見たうえでディスカッションを行う、ファシリテーターを作る、綿密なコマシラバスを作成する等：熊本大学のモジュール例を借りるのではなく、独自の事前学習教材を作成して納品する必要がある。栗林の意見：二年目は、オリジナルの事前学習を作成する必要があるものの、教員によっては現状の事前学習課題をこなせることが分かったのが今年度の成果。伊藤の意見：研修時期・期間を考え直す必要がある。飯塚の意見：研修の成果の評価方法を考えないと、学習プログラムとして成立しない：研修講師スキルの標準化を図る必要がある：研修の目的に合致した教員が来ているのか（自分の授業を良くしたいのか、他教員を指導してその教員の授業を良くしたいのか）が疑問だった。→到達目標や参加者の要件定義をした上で募集をする必要がある。：本研修は、継続的なコミュニティ形成を実現するための良いトライアルになったと思う：若い人はディスコードを使っているが、授業改善サポーターがディスコードに慣れているとはいいがたい。LINEの方が使うのでは？：年を跨いでも率先して課題に取り組む教員が何人集まったのかは疑問。：コミュニティをどのように継続するのかを考えるのが好ましい。岡村の意見：教員が研修を受ける目的を言語化し、上司に達成度合いを評価してもらうと良いのではないか？今回の研修運営の（合田先生の）トークスクリプトを整理し指導記録をまとめることで、研修運営の再現性を担保できるような成果物を今年度作成する必要がある。：熊本大学のモジュールを活用した成果も言語化するのが好ましい。：タイムスケジュールを見直す必要がある（一回当たりの研修時間は適切だったか？）：事前学習、事前レポート、事後学習等含めて15時間で完結するプログラムにすると好ましい。合田の意見：トークスクリプトは、パワーポイントを参考にして欲しい。：90分×6回の研修の方がコミュニティが継続しやすいと思う。：一回はオリエンテーションを行った後、細切れの研修を続けると良い。：6か月後（2024年7月頃）にフォローアップ研修を実施するため、そこで授業改善サポーターが育成されているのかどうかについて評価をしたい。②授業改善サポーターの資質・要件に関する調査報告書『授業改善サポーターの資質・要件に関する調査報告書』を参照仮説は以下のとおり①退学や不登校の問題を抱える学生や学生のレベル差を埋める方法を理解していること②学外（社会）状況を適切に把握し学内での就職指導に役立てること③授業の質を向上するためのアドバイスを適切に行えること④ICT機器を理解し教員にアドバイスを適切に行えること⑤教員が意図せず抱えている問題を発見できること⑥教員間のコミュニケーションのきっかけを作れること→①～⑥を効果的に涵養するための研修が必要→アンケート全体で授業改善に関する回答が多いことから、③は特に求められる。③暫定版授業改善サポーター養成講座のカリキュラム・シラバス・教材等④講座事後に実施されたリフレクションを取りまとめた情報・2023年度の実証講座受講者のコメントを集約、整理『講座事後に実施されたリフレクションを取りまとめた情報』を参照・2024年度に向けた「課題の整理と改善」の「⽅向性の提案」３）次回委員会（2/19）について①議題の確認・令和５年度のまとめ、成果発表の資料等について・令和５年度の実証をもとに、次年度の課題、取組の整理（確認）  |
| 配布資料 | ・第4回委員会アジェンダ・授業改善サポーターの資質・要件に関する調査報告書・講座事後に実施されたリフレクションを取りまとめた情報・研修3アンケート結果サマリ・授業改善サポーター養成講座2023\_研修1\_11102023\_実用（PPT）・授業改善サポーター養成講座2023\_研修2\_12112023\_実用（PPT）・授業改善サポーター養成講座2023\_研修3\_01152024\_実用（PPT）・授業改善サポーター2023\_シラバス（Excel）・20230620 授業改善サポーター事前会議（Word） |

以上